

2019年度第2回入学試験問題

国 語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから8ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・座席番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎカッコ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

俺・リュウ・拓史は若美谷高校の二年生で映画同好会に所属している。新しい映画の主役に元演劇部で三年生の立花亜麻里を迎えようとするが、彼女は出演を断り続けている。交渉の糸口を探していたところ、立花先輩の演劇部退部に新聞部の三根先輩が関係していることがわかり、彼に話を聞けることとなった。以下は三根先輩が立花先輩に行った取材の録音を、四人で聞く場面から始まっている。

ICレコーダーの赤い光を目の前で見つけた三根先輩の顔は、無表情だった。瞳の中が、さっきまでと違って暗い。その目の色を見て、ぞっとする。

——みなさんに話を聞いてみて驚いたんですけど、立花さんって中学まではまったく目立たない存在だったんですね。

三根先輩がズバリと言った。

——演劇部ですらない。文芸部だったから、演劇経験なんてそれまではなかったはずだって聞いて、驚きました。今の写真を見てもらったんですけど、みなさん、逆に驚いてました。

……。

——演劇経験がないところから、あんなふうな声を張り上げて役になりきるのって、恥ずかしくなかったですか？ セリフ読むの、抵抗ありませんでした？ あ、もし失礼なこと聞いてたらすいません。演劇部に入ったのは、前の学校でそういう、目立つ子たちへの憧れがあったからなんじゃないかなあって、思ってたんです。

横に座るリュウと拓史の顔が啞然としていた。俺もたぶん、傍から見たらまったく同じ顔をしていただろう。

1 固唾を呑んでプレーヤーを見つめる。立花先輩が何か言ってくれるのを、アイノのような気持ちで待つ。長い沈黙があつてから、立花先輩が答えた。

——あの……。目立たない目立たないって連呼されるほど、自分が目立たない存在だったとは、思っていないんですけど。

——でも、証言があるんですよ。中学時代は、今みたいにコンタクトじゃなくて眼鏡姿で、いつも図書室で本を読んでもおとなしい子だったって。髪も巻いたことはいないし、真つ黒いストレートヘアで、服装や持ち物に気を使い出したのは、高校に入ってからはずだと——。

——そんな校則の問題なだけでしょ？ 中学の頃まで厳しかったものが、高校で自由になっただけの話。ねえ、それ言ったの誰!?

——いや、そこは守秘義務があるんでお教えできないんですけど。

もうたくさんだった。鳩尾のあたりが押されたようになって、気持ちが悪くなってくる。

やめてくれ、と思う。

——演劇部に入ったのは、一人で本ばかり読んでる地味な自分を変えたかったからじゃないんですか？ 確かに、こっちの学校に来てしまえば、前の学校でのことを知ってる人はいない。だから、高校デビューして……

ふんつと空気が切れる音がして、声の間に急に衝撃音がかぶさる。次の瞬間、立花先輩が悲鳴のような声で叫んだ。

——勝手なこと言わないで！

声こゑが震ふるえていた。

——私がどれだけ、図書室でいろんなものを見たか、豊かな時間を過ごしたか、知らないくせに。地味って何？ 私には友達もいたし、本を読むのだって楽しかった！

立花先輩の声が途切れ、それと同時にレコーダーがカチリと音を立てて止まった。音声データは、ここまでのようだった。

2俺は机の下でぎゅっと拳こぶしを握り締めていた。手の内側が汗あせをかいている。背中に寒気がしていた。

学校は誰のものだ、という声が、さつきから頭の奥おくを震わせていた。

これまでも、何度も何度も考えたことだった。学校は一部の目立つ層のためだけにあること、自分たちのためにないことを、俺たちは知っている。

それを自分のものにした。学校の主役おどに躍り出ようと考えるのは、そんなにいけないことだろうか。高校デビューなんて言葉で呼ばれなきゃならないけど？

映画の世界が自分にもたらしてくれたものの大きさを、改めて考えた。実際の俺は若美谷市のこの場所をほとんど離れたことはないけど、俺の世界は今、教室風景や学校までの通学路だけがすべてじゃない。十八世紀の革命時のフランスを知ってるし、モーツァルトが生きたウィーンを知ってる。『小さな恋のメロデー』を観たときは、これからの二人はどうなるんだろうと考えて、一日中、ラストシーンが頭から離れなかった。

そういうものすべてを、現実より劣おとってるなんて、誰にも言わせたくなかった。中学時代、映画を観る気もないヤツらに「コイメロ」なんてあだ名をつけられたとき、本当は、悔くやしくて悔しくて、夜も眠れなかった。高校に入ってから、リュウがきちんと観てきて、いいと言ってくれたときの嬉うれしさを、今も泣きそうになるくらいまざまざと思い出せる。

俺にとつて映画は**3**そういう存在で、立花先輩にとつて、それは本だろう。拓史にとつては、アニメやイラストがそうだ。

学校の、今この現実だけを生きる青春よりそっちの方が尊いと、思っただけかいけないのか？

「僕はたぶん、核心かくしんに近づきすぎたんだ」

再生が止まったICレコーダーを手に取り、遠くを見つめた三根先輩が言った。ドア一枚をはさんだ美術室からは、相変わらず新聞部員たちの慌あわたしい声が聞こえてくる。

「取材の過程で、立花亜麻里の素顔すがおを曝さらけ出してしまった。記事は残念ながら差し止め。立花が事を荒立てて、あの記事が表に出ないようにしてくれと、先生方に頼みこんだんだ。報道と表現の自由があるはずだ、と僕も交渉したんだけど、残念ながら取り合ってもらえなかった」

「——当たり前だ。バカ」

静かな声をして、三根先輩が伏ふし目がちだった顔を上げる。声は、それまで黙っていた拓史のものだった。顔色がひどく悪い。唇くちびるが震えていた。

「報道と表現の自由？ こんなあんなの偏へんった主観しゅくに基づいた、ただの詮索せんさく趣味しゅみじゃないか。何が核心だよ。素顔だよ。気持ち悪いよ。ストーリーすれすれだ」

「……ストーリーみたいない外見がいけんをしているのは君の方だと思っけど」

三根先輩が片唇かたくちびるを吊り上げて笑う。俺に向け「彼は失礼だね」と切り捨てるように告げた。

「本当ならスクープになるはずだったんだ。みんな知りたيدらう？ 今の人気者が実は何者だったのか」

「別に知りたくない。どうだっていいです」

リュウがきつぱりと言った。リュウもまた、険しい顔をしていた。

ふと、思い出す。人のことを陰かげでこそそそ臭かきまわるような真似まねをするのは性に合わない、リュウは何度も言っていた。それは、自分自身の経験からじゃないのか。しつこい部活の勧誘かんじうも、自分を追いかけて映画部に入りたがる女子のことも、リュウは本当に嫌がっていた。どうしたって注目されてしまう自分のことを、持て余あしていた。

「何者も何も、**4**立花先輩は立花先輩じゃないですか。三根先輩がやったことは、ジャーナリズムでもなんでもない。ただ、女の子を泣かせて、彼女から居場所を奪うばっただけです」

「演劇部をやめたのは立花亜麻里の意思だよ。俺は関係ない。こっちは迷感したんだ。わざわざ遠い場所まで自腹で取材に行つて苦労したのに、スクープを台なしにされた。先生に頼んで記事を書く前に差し止めるなんて、権力を使った暴力だ。bダンアツと言つていい」

「先輩！」

耐えられなくなつて叫んだ。首筋に鳥肌が立つ。きつと、この人にはわからないだろう。だけど、言わずにはおれなかった。

「立花先輩には、もうそうするしかなかったんですよ。先生に言つてまで止めるしか。きつと、他の誰にも知られたくなかったんだ」

その頃に部活をやめ、友達とも距離を置くようになってしまったという立花先輩。

——演劇経験がないところから、あんなふうな声を張り上げて役になりきるのつて、恥ずかしくなかったですか？

声が耳に蘇る。恥ずかしかつたに決まつてる。だけど、立花先輩はそれでもやつてみたかつたのだ。新しい環境の中でだつたら、それができるかもしれないという可能性に懸けて、勇気を出して飛びこんだはずだ。

俺が一年のときに観た『嵐が丘』のキャサリンは、おなかから声が出た堂々としたものだった。きちんと発声の基礎ができていなければ、あんな演技はできない。それが高校に入つてからの一年間だけだつたとしても、立花先輩は相当努力して、自分をあそこまで女優として作りこんでいったはずだつた。

だけど、それは、誰かに「恥ずかしいなんて言葉で、bペンセキされた途端、脆く崩れてしまった。正しく努力してきたからこそ、それを笑われたのが、耐えられなかったのかもしれない。

「先輩、どうして今日、俺たちに教えてくれたんですか。話だけじゃなくて、レコーダーのデータまで」

「だってそれは君たちが教えて欲しいって」

「教えてもらったこと、感謝はしてます。だけど……」

腹いせなんじゃないですか、と冷たい声が出た。気分が本格的に悪くなつてくる。「自分の記事がダメになったこと。先生に注意されたこと。そういうものへのあてつけに、立花先輩の過去を俺たちにバラそうつて考えたんじゃないですか」

三根先輩が口を噤んだ。

この人にとってみたら、ほんの些細な悪意のつもりだろう。だけど、俺はデータを聞いてしまったことを後悔し始めていた。知つてしまったことで、胸に泥のように重たいものがたまり、それが、いつばいまで広がり始めている。

立花先輩は、潔癖なまでに、自分のことを恥じたのだ。

演劇部で舞台上立つことも、目立つことも、青春を謳歌することも。その傍らで、常に三根先輩の目が、お前の過去を知つてるぞ、と光つてる。

だから、立花先輩は、学校を自分のものにできなくなった。演劇も、友達も、手に入れた大事なものをすべて返上して、中学時代と同じ、の君に戻つた。

(辻村深月『世界で一番美しい宝石』『サクラ咲く』『光文社』より)

問1 傍線部 a ~ c のカタカナを漢字に直さない。

問2 傍線部 1 「困睡を呑んで」の意味として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 嫌悪感を抱きながら

イ 失礼だとあきれながら

ウ 興味をおさえられずに

エ どうなることか心配しつつ

問3 傍線部 2 「俺は机の下でぎゅっと拳を握り締めていた」とありますが、この時の「俺」の気持ちとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 立花先輩は中学時代も目立っていたのに、三根先輩がそのことを全く認めようとしないうちに対して怒りを覚えている。

イ 三根先輩が、自分たちのような生徒の価値を全く認めず、立花先輩の過去をしっかりと詮索していることに激しい嫌悪感を覚えている。

ウ 立花先輩は高校デビューをするために様々な努力をしてきたのに、自分は映画の世界にあこがれるだけで何もしていないと恥じている。

エ ジャーナリストとして真実の追求をしているはずの三根先輩が、立花先輩の素顔を明らかにできていないことに対して驚きを隠せないでいる。

問4 傍線部3「そういう存在」とはどのようなものですか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 現実の世界とは異なるが、自分の居場所をつくるものであり、心を豊かにする存在。

イ 空想の世界ではあるが、学校生活という現実をよりよく過ごすために誰にでも必要な存在。

ウ 生徒たちの関係を根本的に変化させるために必要なものであり、時間や空間を超えた存在。

エ 空想の世界ではあるものの、それによって視野を広げることができ、過去を忘れさせてくれる存在。

問5 傍線部4「立花先輩は立花先輩じゃないですか」とありますが、この時のリユウの気持ちとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が女子に追い回されて嫌な思いをした経験に基づき、ストーカーのように立花先輩の正体を追求する三根先輩への恐怖。

イ 文芸部の立花先輩も、演劇部の立花先輩も、思い切って自分を変えただけなのに、そのことを一方的に否定する三根先輩への失望。

ウ 中学時代も、演劇をしていた時も、どちらも本当の立花先輩なのに、しつこく彼女の正体を明らかにしようとする三根先輩への怒り。

エ 中学時代の立花先輩についての誤った姿を真実の姿かのように語る三根先輩への、ジャーナリストとして不適格ではないかという疑念。

問6 にあてはまる場所を示すことばを、本文中より書き抜きなさい。

問7 立花先輩の立場は、中学時代と高校時代ではどのように変化しましたか。次のことばを必ず用いて、四十五字以上五十字以内で答えなさい。

勇氣

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

それほど昔のことではない。十年もたっていないと思う。そのころまで私は宛て名が手書きではない郵便は大半商業メールだと思っていた。少なくとも私信ではない、と。そういう印刷の勧誘に反応することはまずないから、おおむねろくに見ないで処分していた。

ところがある日ある女性から手紙を読んでもくれたか、という電話があり「いや、まだ届いていない」といいながら「あれかな？」と予感があり「待って。ちよつと待って下さい」と屑籠に走りながら「このところ、ちよつといるいろあつて二、三日分郵便をよく見ていなくて」と嘘をつきながらかき回すと、幸いまだその手紙があった。

それは横長の白封筒で、いい訳にもならないがよく来るダイレクトメールとそっくりだった。そして宛て書きもワープロだかパソコンだか知らないが、手書きではなかった。

薄かった。ダイレクトメールの中でその封筒は妙に薄い感触があり「うん？」と思ったのだがつい選別のリズムで屑籠に入れてしまったのだった。あけると一枚だけの私信である。いつも三、四枚はくれる人なので、それもいつもとちがつている。しかし、その一枚に便箋の手書きなら三、四枚になる分量がぎつしり詰っていた。無論それでいい。手書きより読みやすいし紙の節約にもなっているし文句をいう方がおかしいし、若い人にはなんのことか分らないだろうが、薄い紙一枚の手紙というものに馴れていなかった。

一枚で用が足りてしまった時はなにも書かれていない一枚を添えて厚みをつけるという私信の風習がいつの間にか私にあって、薄い一枚だけの手紙に、かすかだが違和感があるのだった。

とはいえいくら偏屈な私でも、そんなことは口にしない。人にすすめるほどのことでもない。大体手書きの一枚に添えるならともかく、タイプ文字の手紙に一枚添えてもうっかりミスとしか思われまいだろう。1手書きの感受性が機能しない時代がとうとう来ているのだと思った。

そして、これも今更といわれそうなことだが、2次の違和感もあのころだけの思い出になってしまった。「あのころ」と書いたが、どうも私には、そんなに遠いことには思えない。

十二時近い夜道を家に帰ることがあった。駅から少し折れると、住宅地のその道を歩く人が前を行く若い女性と私だけになった。追いつけそうだが、どしどし近づく怖がらせてしまうかもしれないと、距離を置いて歩いた。角を曲がる。それは私の曲がる角でもあった。家へは五、六分の角である。あ、案外近所の人かもしれないな、と思い、だったらこんなに距離を置かずに「こんばんは」と声をかけるのも年の功ではないかという気が湧いた。誰が見ても私は無力な老人だが、たぶん一度も振りかえっていない彼女は、あとから来る男の足音に不安を感じているかもしれない。小柄で地味なコート、髪型、低ヒールに肥ったトートバッグから判断すると、孤独と無縁というわけでもなさそう。こんな寒い夜である。声をかけて「御近所かな？」ぐらいの会話を交して何が悪いだろうと、少しその気になった時、ギクリとした。なにかいっているのである。なにか一人で声を出している。笑った。笑っているのである。ぞつとした。

もうお分りだろうか。携帯電話だったのである。私にははじめての経験だった。歩きながら電話をかけている人をはじめ見た。夜道に一人ずつの二人とばかり思っていたが、向うは連れがいたのである。なんだかはずかしかった。自分の感情を笑われたように感じた。

やがてすぐ、そんな光景はめずらしくもなくなってしまった。今更そんな話をして苦笑もされない。

そんな二つの些事をことさらのように書いたのは、今年八十歳になる私に

は決して軽い記憶ではなく、それぞれ小さなショックだったからである。

手書きの私信が激減するのは、あつという間だった。それは目の前の景色が見る見る概念に変わったような当惑だった。情報量ががたりと減った。手書きの文字なら書き手の性別も年齢も教養も性格も体調だって感じられる。それが一気に無表情になった。

「それがいいんじゃない。ひとの字を見て勝手な推理なんかされたくない」たしかにそれで、私も自分の手書きを公表されたくないが、私信ではそれをするというのが私信のよさではないだろうか。

「汚い」といわれる。「手書きの文字を見ると読みたくなーいという気持ちが溢れてしまう」と。

そうか、たしかに私の字を見ると、われながら汚いし、読みにくいかもしれないが、そうやって生活から汚れを嫌いすぎると、そのうち人間は汚れないものだと錯覚して汚れている自分も排除したくなってしまふぞ、と反論は気弱な憎まれ口になってしまう。

閉めた携帯を親指と人さし指ではさんで振るとひらき、もう一度振ると閉まる。閉まる時にカチンと音がする。それが癖になって、半分無意識にカチンカチンと何度もやってくる奴って頭に来るよねえ、とテレビで若い女性がいっていた。するとほぼ同じ年頃の女性が、いるいる、ほんとそういう奴頭に来るよねえ、とうなずいていた。

そうなのか。そんな癖が誰もが思い当る癖として存在するようになったのか、と思ったころ私も携帯を持つようになった。「いっどこにいても電話がかかってくるなんて地獄だ」とさからったが「かけない、かけない、そっちが助けを呼びたい時だけかければいいの」といわれている。買う時には教わったが、忘れることも多い頭になり、いざとなったらかけられるかどうか分らない。

電車に乗ると、ほぼ八〇パーセントの人が携帯を手になにかやっている。車内では話せないから、メールとかゲームとか検索とかいうものなのだろう。メールが来ても返事をしないと怒り出す人がいるという。それをストレスと感じる人には時にやりきれない道具だろう。一つ不便を克服すると以前にはなかった厄介がうまれて、気持というものもなかなか安まらな

いものだと思う。

という感慨も実は3いまの時代に適応できない老人の憎まれ口である。書いていても、もどかしい。この文章の課題は「4新しい大人像」である。しかし今の私はどの世代より変化に適応不全を起している大人である。適応していればなにも感じない変化に敏感に違和感を覚えたり新しいツールに腰がひけてしまったりしている。

かつて「男はXサツポロビール」というコマーシャルがあった。三船敏郎がXビールをのんでいた。あのころは、それに美とか格好よさを社会が感じていたのだと思う。今ではジョークかギャグだろう。

「なに一人でX勝手にビールをのんでの？ なんかあったの？ あつたならしゃべりなさいよ。お醤油切らしちゃつたの、ちよつとコンビニまで走ってくれない」

まったくフェミニズム以後の男の凋落は先が見えなくて不安になるほどだ。真似したいような男なんか何処にもいやしない。仮にいたって老人の私では今更手遅れだけれど、いま女性たちのリアルな突っ込みに耐える「格好いい大人の男」の幻想は、どのように存在しているのだろうか。

昔の話で恐縮だが、ほぼ四十年前私はテレビドラマで一人の男を書いた。戦争体験のある男で同年代の男たちがあまりに沢山戦争で死んだことを忘れられず、戦後の日本がどのように平和と繁栄の時代を生きようとも自分一人は生涯妻を持たず子も持たずひとり片隅で生きようと決めている男の話だった。いわば禁欲のヒーローで「俺だけは戦死した男たちを忘れていない」と勝手に喪に服しているのだが、まだ戦争の悲惨を経験した人も多く、戦後の高度成長期を生きながら、それを死者に対していくらか後ろめたい気持がある人も少なくなかったのだ、そういう僧侶の役割を担うヒーローを必要としていたのだと思う。

いまはそんな分りやすい存在をつくりにくくなってしまった。多くの人の思いが結晶となった5ヒーロー、ヒロインの幻想が困難になってしまった。

と、勝手に現在に適応できなくなっている老人が思っているだけなのだろうか。そうかもしれない。

私にはこのごろのテクノロジーの変化が病的に早く思えてならない。静か

にその時々の変化や成果を味わう暇もなく、どしどし神経症のように新發明新ツールが次々現われては現在を否定する。その結果の新製品、新ツールも病的に細かい変化で、なくてもやっつけていけるものばかりどころか、ない方がよかったのではないかと、少し長い目で見ると人間をこわしてしまうような細部の発明を目先だけのことで流通させてしまう。

あ、やっつけてしまった。

適応不全の老人が「昔はよかった」風なことは決しているまいと思つたのに、いつてしまった。もう仕様がな。そうなのである。私は便利さは感受性をのつぺりさせるし、豊かさは活力を奪うとか、そんなことを思っている時代おくれの人間です。

そして、いま大人というものがいたら、こんなことをいう大人がいいな、と思つているのです。

魂のはなしをしましよ

魂のはなしを！

なんと長い間

ぼくらは 魂のはなしをしなかつたんだらう

「burst 花ひらく」という詩です。同じ詩人が、いまの日本には「慰安が吹き荒れている」と。その結果、

なやみが枯れるねがいが枯れる言葉が枯れる (日々を慰安が)

といっています。

その吉野弘さんもこの春亡くなりました。

(山田太一「適応不全の大人から」『夕暮れの時間に』(河出書房新社)より)

(注) フェミニズム：女性の権利を主張する運動。

問1 傍線部1「手書きの感受性が機能しない時代」とありますが、その「時代」の感受性を表す例として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア いつでもどこでも携帯に電話がかかってくることを嫌がる感覚。
- イ 宛て名が手書きでない郵便は大半が商業メールであると思う感覚。
- ウ 一枚だけの私信には白紙を一枚添えて厚みをつけようとする感覚。
- エ 携帯にメールが来ると早く返事をしなければならぬと思う感覚。

問2 傍線部2「次の違和感」とありますが、筆者の「違和感」の説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 振り返らないでいる女性の不安を勝手に勘ぐってしまう、筆者の誤解。
- イ 歩く人が前に行く若い女性と私だけになったことへの、筆者の気まずさ。
- ウ 夜道を歩く女性が一人で携帯電話をかけていたのを初めて見た時の、筆者の驚き。
- エ 連れないかと思つて誘おうとした女性に連れがいるとわかつた時の、筆者の羞恥心。

問3 筆者の言う「手書きの私信」の良さとはどういう点ですか。そのことを表す一文を本文中より探し、その最初の五字を書き抜きなさい。

問4 傍線部3「いまの時代に適応できない老人の憎まれ口」とありますが、その例としてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一つ不便を克服すると、以前にはなかつた厄介がうまれてしまうという筆者の考え。
- イ 豊かさは人間の活力の無駄をなくし、便利さは感受性を豊かにするといふ筆者の予感。
- ウ 新製品、新ツールが次々と流通し、人間をこわしてしまふのではないか

という筆者の心配。

エ 生活から汚れを排除しすぎると、人間は汚れないものだど錯覚を起こすという筆者の反発。

問5 傍線部4「新しい大人像」とありますが、筆者の望む大人とはどのようなものですか。解答欄に合うように本文中より五字で書き抜きなさい。

問6 X にあてはまる最もふさわしいことばを次から選び、記号で答えなさい。

- ア おどけて イ 語つて ウ 黙つて
- エ きどつて オ つらそうに カ 楽しそうに

問7 傍線部5「ヒーロー、ヒロインの幻想が困難になつてしまつた」とありますが、それはなぜですか。「ヒーロー、ヒロイン」の特徴を明らかにしつつ、その理由を本文中のことばを用いて解答欄に合うように四十五字以上五十字以内で答えなさい。

「以下余白」

